

第 34 回日本受精着床学会・学術講演会

発表番号 O-170

長野県 2016.9.15-9.16

当院における流産・不育症患者への精神的支援

○加藤 真智子¹ 田邊 加代子² 難波 未来¹ 小松原 千暁² 杉本 朱実¹ 田中 久美子¹
井上 朋子¹ 福田 愛作² 森本 義晴¹

HORAC グランフロント大阪クリニック¹ IVF 大阪クリニック²

【目的】女性の社会進出やライフスタイルの変化により晩婚化が進んでいる。加齢に伴う流産率の上昇と共に、流産後に約 10%の患者がうつ状態に陥るとの報告もある。我々の施設では 40 歳以上の患者が 3 割以上を占めており、流産後患者の精神的支援は必至であると考えている。現在我々が実施している支援の状態について報告する。

【方法と結果】流産処置を受けた患者に対し 2013 年より「流産後の心身の変化」や「看護師、臨床心理士のサポート体制」について記載した、夫婦で読めるパンフレットを作成し配布している。「もらった直後は実感があまりなかった。時が経つにつれ現実味が出てきて辛かった。今は心の支えにしたいと思っている。」「夫に言えない気持ちをパンフレットで汲み取ってもらえた。」などの意見が寄せられた。同年、流産既往がある患者を対象に、不育治療体験者とピアカウンセラーを交えた患者交流会も開始した。担当スタッフは看護師（生殖医療相談士含む）、臨床心理士、遺伝カウンセラーである。看護師による流産後の心身の変化についての情報提供の後に、不育治療体験者の発表の場を設けた。後半はグループに分かれ患者を加えた交流の場を設定した。終了後のアンケートでは、参加の動機で 70%の方が「同じ経験をした人と話をしたかった。」と回答した。全体の感想として「他の方と話をし前向きな気持ちになれた」「自分の気持ちを振り返り涙も出たが、よかった。」「誰かと話をすることが大切。忘れていました。」など全員が「参加してよかった」と回答し、今後もこのような機会を望む意見が多く聞かれた。

【考察】パンフレットは患者が必要とした時に、繰り返し読むことができる利点がある。同じ立場にある患者間の交流は、悲しみや孤独感を共有でき、精神的支援の一助となると考え

られる。今後も流産後患者が語れる場を継続して提供しつつ、流産・不育症患者に対する精神的支援の改善を目指したい。